

“大人の危害” およびその他

今月十日タゴールの二回目の講演、題を The Rule of The Giant and The Giant-Killer と云う。『晨报』第六面によると、“意味を訳すと大人を管理する方法および大人の危害”ということだそう。わたしはタゴールについてまったく門外漢で、その日に聴きに行かなかったから、彼の講演の主旨はいったい何なのかは言うことができない。ただ常識からすれば、この題目は明らかに比喻であって、たぶん童話の中の典故を借りたのであろう。こういう“巨人”伝説はどこにもあって、最もよく知られたのはイギリスの三歳のこどもでもよく知っている『巨人を殺したジャック』(Jack the Giant-Killer) の物語である。新聞に摘録された講演の大意からすると、タゴールの考えはどうかや巨人を物質主義になぞらえて、巨人を征服したのは精神文明であるようだ。だからこの題目は“巨人の統治と巨人を殺す者”とすべきもののようだ。だがわたしは一人の素人で、子どもの“ほら話”で“詩聖”の題目を解釈するのは、当然いささか自信がないわけにはいかない。みなさんの指教をお願いします。

それから、タゴールに反対する問題についてはわたしにもちょっとした意見がある。重ねて言っているが、わたしはタゴールが解らない、(言えば笑われるだろうが、彼の本は何部か買ったのだけれども、) だから反対にも歓迎にも両方とも加わらなかった。迎える土地側の礼儀としての歓迎はすべきだとは思いますが、もしかの老先生の看板を借りて玄学を売りこもうとするならそれは真当ではないし、科学を擁護する人が群起して反対するのは、その志は嘉みすべきだけれども、いささか神経過敏たるを免れない。看板を借りて玄学を売りこむのは真当でないと言うのは、手段が卑劣だと言っているに過ぎないのであって、それがほんとうに中国を玄化できるなどとは信じていない。思想の力は群衆に対しては可哀想なほど微弱である。これはわれわれあまり唯物史観が解らない人間でもそう思う。仏教がやってきて二千年、中国固有の拝物教崇拝に成り変ったほかには何の遺留もなく、ただ梁漱溟先生がまだ称賛している後向きの第三の路が残っただけである。しかしながら自身も孔家の生活を送ったので、残った仏化した小居士たちは、これ又“外道”であるバラモンを仏法の“母”と認めた。そのバラモンたるタゴール翁がどんなにすごいとしても、釈迦文仏に及ぶとは限らぬと思う。彼の講演が将来の中国の生活にどんな影響があるかを言おうとしても、わたしは実際附和できない、——その結果を推測するに、名前を一つ付けて、何篇かの文章を刊行し、先農壇や真光劇場で何度か賑やかしをやり、精進料理店や洋書店の商売がちょっとよくなったのがせいぜいで、後はみんなして車に載せてハイお終いで、デューイやラッセル(ドリスはあげるまでもない)が去ったのと同じであろう。しかしながら目下熱心な人々はいそいそどたばたと呼号奔走し、まるで大難に臨むかのよう、いったい何を恐れているのだろう。昔韓文公は大筆を揮って、「原道」を書き、仏骨を諫めたが、それが国のため民のための心であったことはもとより欽佩の至りだが、今日から見れば彼が感情によって事を行ない一騒ぎしたに過ぎず、実際には国民の生活、思想には何の利点もなかった。わたしの友人某君は、天下には白痴と頑固者以外に、誰も多少なりとも他人の影響を受けない者はいない、だがまた完全に他人に跟いて行く者もないと言う。いま熱心な人は全国の人間がタゴール翁に跟いて

行くのではないかと恐れているようだが、これはあまりに理想的に過ぎるようだ。中国人は非常に自大であるが、また非常に自己卑下でもあり、自分はただ感情的で、少しの理知も意志もない、一たび外面の風浪に遭えば、立っていられず、波に随い流れを逐わずにはいられないと思っている。わたしは中国の国粹派ではないが、中国人がこんなにも耐え性がなく、これほどまで可哀想なくらい軟弱だとは信じないが、ただ反対に中国人は頑固すぎて、なかなか他人の影響を受けないと思っている。もしみんなが言うようなのを信ずるなら、中国はちょっとした異分子に遭えば“それが向上する機会を押え”ようとする、そうなればこの国民はそれだけで完全に独立の資格を失ない、ただ奴隷となるだけで、むろん他人を怨むことなどできない。中国人は結局どういふ種族なのだろう。どうかみなさん自分で決められよ。

いまの思想界の趨勢は排外と復古である。これはわたしが三年前に予想したことで、“不幸にして吾が言中れり”、竺震旦先生*も又不幸にして適たま来華され、“驅象団”の白眼に遭われたのは、さらにまことに妄^{いむれ}無き災であった。(民国十二年五月)

※初出：1924年5月14日『晨报副刊』

* 竺震旦先生 タゴールが来華の際に梁啓超が彼に贈った名前。竺は天竺、震旦は古代インドが中国を呼んだ語の中国語訳、それを合わせたのである。「驅象団」はおそらくタゴールの中国訪問に反対する左派を言うのであろうが、周作人の嫌味であろう。象はもちろんインドの比喩、つまりタゴールを言う。